

<今朝の聖書から>

村上定幸

【異邦人】この箇所は、説教に続くところに位置しています(6:17~49)。マタイですと“山上の説教”ということになります。ここに一人の百人隊長が出てきますが、この人は異邦人でした。ガリラヤと呼ばれている地域は A.D.44 までは、ローマ帝国の州に編入されていなかったため、ヘロデの国民軍の指導者かも、と思われます。3 節に“イエスのことを聞いた百人隊長は、ユダヤ人の長老たちを使いに来て、部下を助けに来てくださるように頼んだ”とあることから、ユダヤ人にも人望のある、割礼を受けていない、しかし信仰深い異邦人だったことが分かります。4~5 節に“長老たちはイエスのもとに来て、熱心に願った。「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです。」”と、会堂を寄進するほどの人だったことも分かります。

【ユダヤ人の資格】百人隊長自身、“自分にはユダヤの指導者を自分の家に招待するほどのものではない”と、しかも使いを送って、イエス様に伝えています(7:6)。

【一大事に】この何にも頼ることのできないほどの、癒しを必要としている時に、“自分にはお願いする資格がない”と伝えざるを得なかった方に、お願いしたということになります。私たちも、“解決されようもない”としか思えないことに、幾度となく直面します。

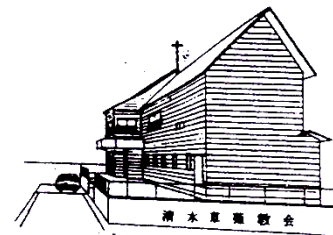
【信頼の歴史】聖書は、自分には何ともできないような重大事に直面し、主の前に祭壇を築いた歴史を記録しています。ノアもそうしましたし、アブラハムも感謝の祭壇を築きました(創世記 12:7 そのた)。幸せなことを主に感謝することができたのです。しかし、悩みのただなかで、願いの祭壇も、感謝の祭壇も築けないでいることがよくあります。このような時に、ただ怒りに燃えたり、嘆いたり、達成感に酔いしれることの危険性を、聖書は教えています。

【イスラエルの中でさえ】この言葉は、先にみましたように、百人隊長がユダヤ人ではなかったことを示しています。ルカは特に、この異邦人であるということに力点を置いて語っています。主の目にそう見えたことと、信仰の異邦人への伝達を語っています。長い歴史の後、日本にまでやって来たということになります。言いかえると“ユダヤ人の王としてお生まれになった方”と語る博士である異邦人も私たちも、信頼しているという理由で受け入れられているのです。“病気で死にかかっていたしもべ(7:2)“が、元気になっていた(7:10)という奇跡を生み出しているのです。

【元気になること】元気になること(聖書の直訳は“健全”となります)は大切なことです。主の癒しも奇跡もしるしも、教えの全てが、救いの契約の中で、理解されなければならないことを、忘れないでいましょう。

週報

2011年 5月 29日



伝えよう 救い主を
迎えよう 主の民を

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

牧師 村上 定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル公会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈禱会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885

静岡県清水区草薙杉道3丁目2-26

☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp

振替口座 00890-6-214042